

平成 28 年度「大学生の力を活用した集落復興支援事業」

川内村 COP 恩返しプロジェクト活動報告 (実態調査)



2017 年 3 月

福島大学 COP 恩返しプロジェクト×川内村一区高田島

もくじ

- 1 活動の経緯
- 2 COP 恩返しプロジェクト概要
- 3 地域概要
- 4 活動内容
- 5 発見した地域資源
- 6 調査について
- 7 課題解決のための提案から実施へ
- 8 集落の活性化案
- 9 おわりに

1. 活動の経緯

私たちは1年次に総合領域科目である「むらの大学」を受講した。この授業は1年間を通して、県内や、特にフィールドワーク行う川内村・南相馬市について、インターネットや資料、実際に講師の方を招いて学ぶ座学的な内容から、実際に訪れたり住民方々にインタビューを行ったりする実践活動的な内容を通して震災学習を行うものである。この授業の最大の魅力として夏季休業期間に行われる、実際に地域に赴いて2週間滞在するフィールドワークや、インタビューを通して直接的に学ぶというプログラムがある。私たちはこの2週間、川内村でフィールドワークを行った。

具体的な活動の例としては、川内村第一行政区の遠藤区長にバスで川内村を案内していただいた。川内村を回る中で私たちは放射能問題などマイナスなイメージを感じさせない川内村の豊かな自然、原風景を見ることが出来た。授業の中で放射能について講師を招き講演を受けたので簡単な知識があったため、この川内村の安全性と素晴らしい自然の魅力を発信したいと感じた。

また、フィールドワークでは、震災以前川内村の産業のひとつである畜産業についても遠藤区長や住民の方々から説明を受けた。震災以前は村内にいくつもの畜産業者がいたのだが、震災直後の全村避難の際に家畜を置いていかななくてはならなかったということや、一時帰宅で戻れた際の牛舎の悲惨な状況などを教えていただいた。さらに今回の調査対象地域である川内村第一行政区高田島で古くから行われる伝統行事にも参加することが出来た。

このほかにも2週間のフィールドワークで私たちが学んだことはとても多く、同時に地域が抱える課題やたくさんの魅力を発見することが出来た。この2週間のフィールドワークの後には発見した地域課題の解決に向けて各班が解決策を考案し、提示するというものだった。

しかし、1年次はこのように解決策を提示するだけで終わってしまった。私たちはそれぞれに考えた解決策を実行させるため、1年次に発見した川内村の魅力から引き続き川内村に関わり続けたいという想いを果たすために自主的に集まったのである。そこで結成したのがCOP恩返しプロジェクトである。

このプロジェクト結成に際して挙げられた課題として一番大きなものが資金の確保であった。3グループがそれぞれに掲げる目標、活動内容を遂行していくために必要な資金を確保するために、本事業の補助金と日本財団が運営するGakuvo Style Fundを活用した。その後はそれぞれの班が地域での調査や活動を開始したのである。このように本事業としては1年目であるが、私たちとしては2年目の活動となるので、今年度は調査をもう一度行い、発見した地域課題に基づいた解決案を実際に企画実施するところまでを目標とした。

2. COP 恩返しプロジェクト概要

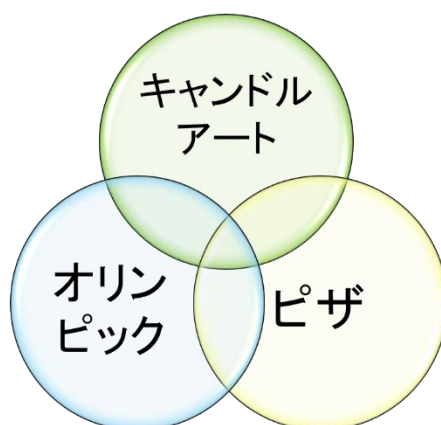
私たちは、昨年地域実践学習「むらの大学」という授業において、川内村に2週間泊まり込むフィールドワークを行った。その中で、川内村の現状や魅力・課題などを発見し、加えて住民の方々の温かい人柄に惹かれ、大学生ならではの視点から川内村に貢献できないかと考え始めた。

身近な福島大学の学生が川内村を訪れるきっかけを作ったり、村民のみなさんが楽しめるようなイベントを企画したり、川内村の食材を使った商品開発を行ったりするなど様々な活動を行い、村を活性化したいと考え、プロジェクトがスタートした。

まずは、昨年授業でフィールドワークを行ったこともあり、地域について理解はしていたが、改めて調査を行い、住民の方々の声やニーズから、自分たちのやりたいことが本当に求められていることなのか、見極めることも含め、調査を行った。

COP 恩返しプロジェクトは「むらの大学」を受講した二年生のみ総勢 19 人で構成されている。COP とはキャンドルの C、川内オリンピックの O、川内ピザの P を意味している。このように私たちは 3 グループに分かれており今年 1 年間活動をしてきた。

3つのプロジェクトが1つに力を合わせ結成川内村に恩返しをしたい！



活動は、主にそれぞれの COP の班での活動がメインとなっていたが、この写真のように

COP 全体でのミーティングの機会も設けることで各班の活動状況の共有や、ほかの班の調査や企画に自分たちの班も参加したり、コラボ企画を考案したりすることも可能となった。



3. 地域概要

今回私たちの調査活動を受け入れてくださった地域は、福島県双葉郡川内村に位す

る第一行政区高田島の方々である。



(川内村 HP より)

川内村は8つの行政区に分かれている。川内村は震災直後に避難指示が出され、避難を余儀なくされた地域である。しかし、川内村の遠藤村長は他町村に比べ、いち早く避難指示を解除したことで、双葉郡内では帰還率が一番高い地域となっている。

【双葉郡8町村の人口と避難状況】(単位:人)

町村	人口			避難者		
	2011年 3月11日	2015年 2月1日	増減数	総数	県内 避難者	県外 避難者
広野町	5,490	4,990	▼500	3,258	2,874	384
楢葉町	8,011	7,066	▼945	7,448	6,435	1,013
富岡町	15,830	14,125	▼1,705	15,263	10,923	4,340
川内村	3,038	2,546	▼492	1,152	954	198
大熊町	11,505	10,841	▼664	10,834	8,240	2,594
双葉町	7,093	6,095	▼998	7,019	4,047	2,972
浪江町	21,542	18,358	▼3,184	21,037	14,636	6,401
葛尾村	1,567	1,441	▼126	1,487	1,390	97

※町村調べ。避難者数は1月末または2月1、2日現在
※2015年人口は県推計人口

2015年3月2日
福島民友新聞より

表1 川内村 震災前後の人口推移

	震災時 2011年3月11日	震災後 2015年6月1日
人口 (住民基本台帳)	3,028人	2,722人(うち村内 生活者1,615人)
高齢化率	34.00%	40.31%

川内村の帰還率は、上の「双葉軍8町村の人口と避難状況」から、約8割となっている。

今回私たちが調査の対象として第一行政区を選んだ理由は、1年次のむらの大学フィールドワークで訪れた際にお世話になった方々がたくさん住んでいらっしゃる地域であることや、以前から福島大学以外の大学生も積極的に受け入れていた地域であるので、私たちのことも温かく受け入れてくださったからである。

また、この地域は都会から移住してきたIターンと呼ばれる方々がたくさん住んでいるということが昨年度の調査から分かっており、外の人を受け入れる土壌ができていることが理由として大きかった。Iターンの方々は川内村の住人としての意見はもちろん、ほかの地域に住んでいたということから第三者の視点で客観的な意見もいただくことができ、とても勉強になった。

表1は、川内村の震災前後の人口推移と高齢化率である。人口減少と高齢化が加速したことがわかる。

4. 活動内容

7月2日	調査	川内村第一行政区にて、秋季例大祭や伝統行事について調査
8月6日	調査	午前：1区、2区、移住者等に調査インタビュー
8月24日	活動	午前：川内小学校 教頭先生と打ち合わせ 小学校体育館・グラウンド下見
9月1日	活動	例大祭に向けて村の方と相談
9月2日	活動	川内オリンピック最終確認
9月3日	活動	実際にイベントに向けて川内村で作業
9月3日	活動	午前・午後：第2回川内オリンピック開催 終了後に参加者全員にアンケート調査
9月3日	活動	午前：現地入り後ピザの調理 午後：川内オリンピックで参加者全員に振る舞い
9月10日	活動	第一行政区高田島豊年踊り・秋季例大祭開催 豊年踊りにてキャンドルアートを住民の方々と共に開催





5, 発見した地域資源

調査や活動の過程で、発見した地域資源は、以下の3つである。



豊かな自然



人の温かさ



大地の恵み

(1) 豊かな自然

まず、一つ目として豊かな自然についてである。自然を生かした施設としていわなの郷という施設がある。この施設には、いわなの釣り堀・いわなの養殖場・レストラン幻魚亭・体験交流館がある。釣り、食、学びが体験できる。また、宿泊施設として、コテージがあり泊まることができる。体験交流館では、川内村に伝わる昔ながらの味噌づくりやいわなの燻製作りなどが体験できる。他にも地元のお母さん方が先生になって、漬け物や郷土料理などの教室を開くこともある。他にも、集会、研修、展示などの会場として利用できる。





(引用：川内村ホームページ)

次に、川内村のマスコットキャラクターにもなっている天然記念物モリアオガエルの生息地となっている平伏沼である。平伏沼は山の頂上にある沼で、周りをナラやブナの木々で囲まれている。そこに住んでいるモリアオガエルは、水辺の高い所に巣を作り、泡状の卵を産むという珍しい習性を持っている。モリアオガエルの繁殖地として国の特別天然記念物指定を受けている。産卵の時期は、6月上旬から7月中旬でそのころには平伏沼の周りの木々に泡状の卵がたくさんぶら下がっている。



さらに、絶景ポイントとしてサラサドウダンの名所、高塚高原がある。川内村の自然の中でもトップクラスの美しい場所である。山頂に続くハイキングコースには、村の花でもあるサラサドウダンやヤマツツジ、シロヤシオの群落もたくさんあり、他にも、水芭蕉やクリンソウが咲く。ハイキングコースを進んで頂上に着くと、そこには「ペラペラ石」と呼ばれる巨大な石がある。上に登ると川内村を見下ろすことができる絶景スポットである。ちなみに昔、馬の放牧をしていた頃、石の上で10人くらいが馬の監視をしながらペラペラと喋っていたことからその名がつけられた。



(引用：川内村ホームページ)

最後に、川内村の夜空を彩る星空である。普段、生活している場所では見えない星も肉眼で見ることができる。満天の星空を眺めることのできる環境が川内村には整っている。それはまさに息をのむような美しさである。星空を見るために川内村に行こうと思えるぐらいのものだ。

(2) 人の温かさ

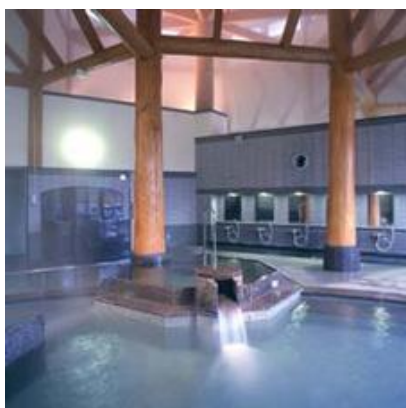
次に二つ目として人の温かさである。ヒアリング調査をするために各家庭を訪問した際、温かく私たちを迎えてくださった。家族のように私たちと会話をしたり、時には手料理を振る舞ってくださったり、野菜をいただいたこともあった。また、私たちが困っているときやイベントを実施する際には、多くの方が協力、お手伝いをしてくださった。さらには、村の伝統行事であるお祭りに外部の人たちを迎えて、実施しているということに川内村のすばらしさを感じた。震災以前から神社の天井絵を東京の美大生に描いてもらったりと若者との交流が盛んであった。震災後は福島大学をはじめとして多くの大学生を受け入れている。少子高齢化が進み私たちのような大学生の世代が少ないためか、よく村の外から来る若者から力ももらっているという話を耳にした。私たち若者もまた、それ以上に村民の方に力ももらっていた。





(3) 大地の恵み

三つめは大地の恵みである。まず、温泉である。川内村にはかわうちの湯という施設がある。泉質はアルカリ度が高く、肌がツルツルとなることから「美人の湯」とも言われている。様々な種類の温泉があり、疲れを癒すのにはとても良い。



(川内村ホームページより)

次に、高原野菜である。川内村で採れる野菜はどれもおいしい。各家庭で栽培しており近所の方との野菜の交換がコミュニケーションの一つとなっている。川内村には農産物等直売所あれ・これ市場がある。ここは、地元の新鮮野菜を取り扱うお店である。かわうちの湯の駐車場内にあり、地元の農家さんが作る新鮮野菜は、温泉客や観光客、地元の方々に評判である。おいしさの秘密は、作る人の腕と村の特徴である朝晩の寒暖差だ。新鮮野菜の他にもお土産や日用品なども数多く取り揃えている。



(引用・ひとの駅かわうち日記より)

野菜の他にもそば、いわなが有名である。そばは、冷涼な気候や乾燥した土地でも容易に栽培ができ、湿潤に弱いという特徴がある。朝晩の寒暖差の激しい川内村の気候にかなり適しており、転作として広まった。そばを使った特産品として蕎麦ビールが開発されて



いる。

川内村でいわなが養殖されている理由として、もともと自然のいわなが生息しており海が遠く、流通の少ない川内村では重要なたんぱく源、カルシウム源となっていた。お正月にはいわなを乾燥させて出し汁を作り、その出し汁を使用したお雑煮が作られるなど古くから川内村の方々に愛されていた。そこで川内村の方々に親しまれているいわなを使った村おこしとして上記の「いわなの郷」が作られそこで養殖されるようになった。

6. 調査について

7月2日、8月6日に地域課題把握のための調査を行い、以下の3つのことが得られた。

- ①伝統行事に対する住民の思いが強い。お祭りは、交流の場になっている。
- ②村の子どもからお年寄りまで集まることのできる機会があればいい。
- ③川内村の食べ物など、特産品がほとんどない。

(1) 以上の3つの課題を解決するための提案

- ①伝統行事に対する住民の思いが強い。お祭りは、交流の場になっている。
→高田島では、以前に比べて世代間の交流が少なくなった



伝統行事を盛り上げたい！

- ②村の子どもからお年寄りまで集まることのできる機会があればいい。
→震災後、人口が大幅に減少し、少子高齢化が加速したことにより、村の活気がなくなっている



多世代が楽しむことができ、
健康増進のためのスポーツ大会を開催したい！

- ③川内村の食べ物など、特産品がほとんどない。
→村の魅力が外に発信できていない。



川内村の特産品を使って、魅力をアピール

7. 課題解決のための提案から実施へ

調査で得られた地域課題と解決に向けた提案を、実際に地域で実施した。

3つの提案を、3つのプロジェクトとして実施した。

C：キャンドル、O：オリンピック、P：ピザ

① 伝統行事を盛り上げたい！

C

竹キャンドルナイトプロジェクト

貴重な交流の場、伝統行事(豊年踊り)を活気づけるため

住民の方々の指導のもと、高田島の竹を伐採し、竹キャンドルをみなさんと協力し作製



豊年踊りにて**復興への道**が高田島の夜を照らした

② 多世代が楽しむことができ、健康増進のためのスポーツ大会を開催したい！

O

川内オリンピック

川内村の方々が世代をこえて交流できる場、体を動かす機会をつくるために
川内オリンピックを開催



子どもからお年寄りまでたくさんの方々の交流の懸け橋となった

③ 川内村の特産品を使って、魅力をアピール

P

川内ピザ

川内村の特産品、大地の恵みをふんだんに使用した川内ピザを開発。
各イベントに出店することで、川内村の魅力をピザを通して発信！



生地: そば粉 トッピング: いwana、川内村のおいしい野菜

8. 活性化策の提案

1. 竹キャンドルを用いた川内村の祭りの活性化
2. 第三回川内オリンピックの開催
3. 第二回川内マラソンへの川内ピザ出店
4. 大学祭での川内村ブースの設営
5. 川内村の方々との交流の継続

(1) 竹キャンドルを用いた川内村の祭りの活性化

川内村の祭りで竹キャンドルを使用し、川内村の夜に竹キャンドルの温かい光を灯すことで、祭り自体の華やかさを上げ、幻想的な光の空間を演出し、より魅力的な祭りへの活性化を図る。祭りを活性化することで、より多くの川内村や村外の方々に祭りに訪れてもらい、川内村の魅力を村の内外に発信することで、川内村の地域活性化を図る。

(2) 第三回川内オリンピックの開催

第三回川内オリンピックを開催することで、川内村の子どもからお年寄りまで幅広い年代の方々が集まって、みんなで体を動かす機会を作り、あらゆる種目に挑戦する中で協力や交流が生まれ、人間関係が深まるきっかけを作る。また、大学生との交流の場を継続することで、川内村の方々と福島大生との信頼や絆を構築し、更なる地域活性化に繋げていく。

(3) 第二回川内マラソンへの川内ピザ出店

第一回川内マラソンに続き、第二回川内マラソンに川内ピザを出店することで、川内村の特産品であるいわなやそば粉、美味しい野菜を川内村内外のたくさんの方々に発信し、川内村の魅力を発信することで村の活性化を図る。また、川内村のイベントに川内ピザの出店を続けていくことで、川内ピザの質や美味しさを更に追求し、より多くの方々に川内村の大地が育んだ食べ物の美味しさを伝えたい。

(4) 大学祭での川内村ブースの設営

これまでは川内村内での魅力発信を中心に行ってきたが、キャンドルやオリンピック、川内ピザ班のこれまでの活動経緯や、川内村で自分たちが発見した地域の宝・魅力をまとめ、それを大学祭の川内村ブースに展示することで、今度は川内村の外でも訪れるたくさんの方々に川内村の魅力を伝えられるような機会を作る。川内村ブースでは川内ピザの販売や竹キャンドルの展示を行うことで、訪れた方々が実際に川内村の魅力に触れることができるような、体験的なブースを設

営することで、より実感を伴った川内村の魅力を発信する。

(5) 川内村の方々との交流の継続

これまで行ってきた活動や川内村の方々との交流を継続していくことが、川内村の方々や福島大生との信頼や絆を育み、それが川内村を活性化する鍵となるはずだ。私たちの大好きな川内村を活性化していくために、川内村の方々との信頼関係は必要不可欠であり、それなしに地域の活性化は進まない。だからこそお互いの信頼や絆という基礎を固め、活性化への策を構築していくために、今後も川内村の方々との交流を継続していくことが、川内村活性化につながると考える。

9. おわりに

この活動の成果は三つ挙げられる。

一つ目は、私たち福島大学生の取り組みを多くの村民の方々に知ってもらえた。

二つ目は、イベントの実施により村を盛り上げることができた。

三つ目は、村民の方々にふるさとのよさ、魅力を再認識してもらえたということである。

紙媒体や各家庭への訪問、防災無線を使つての広報を通して、そして直接会つて交流をすることで私たちの活動への認知が広まっていった。また、イベントの実施により村を盛り上げるだけでなく、村外の人、若者独自の視点で行つたことにより村民の方々にはいろいろな気づきがあった。

今後の活動として、福島大学生と村民の方々の交流を継続し、さらに深めるということ。加えて、村外に川内村の宝、魅力を発信し続ける、常に活気あふれる村に近づけることを目標に活動していく。

最後に、調査やイベント実施にご協力いただいた、一区高田島のみなさんをはじめとして、川内村のみなさんには大変お世話になりました。ありがとうございました。